
(1) 内科・小児科・基幹定点把握対象疾患に関する動向

鹿児島県感染症発生動向調査委員会委員
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科微生物学分野
教授 西 順一郎

令和4年の内科・小児科定点把握疾患の動向は、COVID-19 パンデミック3年目に伴う感染対策によって大きな影響を受けた。特にオミクロン株の小児での流行が大きく、多くの感染症で小児の報告数が減少した。

インフルエンザの定点医療機関からの報告数は180人であり、前年の22人より増加したものの大きな流行はみられなかった。保健所別では名瀬が第52週に定点あたり5.8となるなど多かった。年齢別では15歳未満が半数近くを占め、亜型はA/H3N2が中心であった。

小児科定点対象疾患の報告数は、感染性胃腸炎(13,881人)、手足口病(3,274人)、RSウイルス感染症(1,379人)、咽頭結膜熱(1,149人)、突発性発疹(1,009人)、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎(766人)、ヘルパンギーナ(753人)、水痘(225人)、流行性耳下腺炎(112人)、伝染性紅斑(40人)の順であった。微増した感染性胃腸炎と前年と同数のヘルパンギーナを除いてすべての疾患で前年より減少した。

感染性胃腸炎は、前年に比べて404人多かったが、ほぼ前年並みの流行であった。第3週(10.91)がピークだったが、5~6月にも流行がみられた。病原体検査ではアデノウイルスCが1件検出されているのみであり、ノロウイルス等の検査の充実が望まれる。

手足口病は、令和3年秋からの大きな流行が令和4年第3週まで続いた。夏に再び増加し第27週に定点あたり報告数が3.54とピークになったが、それ以降の流行はみられず、前年より2,241人減少した。

RSウイルス感染症は前年より3,521人減少した。定点あたり報告数は、前年12月の流行が1~2月も継続し第3週に2.02になったが、その後は大きな流行はみられなかった。全国では夏に流行がみられたが、本県の流行時期は全国と異なる傾向が続いている。感染者の年齢は4歳以下がほとんどを占めた。

A群レンサ球菌咽頭炎は前年の1,902人から1,136人少なく、COVID-19流行に伴い学校でのマスク着用や給食での黙食が継続された影響が大きかったと考えられる。また、外来診療で咽頭所見の観察やA群レンサ球菌の迅速抗原検査の実施がためらわれたことも影響した可能性がある。

基幹定点把握対象疾患では、無菌性髄膜炎が9人報告され、前年より3人多かった。病原体として髄液からパレコウイルス3が1件検出されている。その他の疾患には特記すべき特徴はなかった。

疾患別検査件数は前年の26件から12件に減少しており、COVID-19の影響が考えられるが、今後病原体サーベイランスのさらなる充実が望まれる。

1)インフルエンザ(鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等を除く)

(定義) インフルエンザウイルス(鳥インフルエンザの原因となるA型インフルエンザウイルス及び新型インフルエンザ等感染症の原因となるインフルエンザウイルスを除く)の感染による急性気道感染症である。

令和4年のインフルエンザは、インフルエンザ定点医療機関から180人(累積定点当たり報告数1.98)の報告があり、令和3年(22人)より158人多かった。県内及び全国ともに前年に引き続き大きな流行が認められなかった(図2-1-1、図2-1-3)。保健所別では、名瀬、鹿屋、鹿児島市の順に多かった(図2-1-2)。年齢別では、15～19歳(21.7%)、10～14歳(15.0%)、20～29歳(12.2%)の順に多かった(図2-1-4)。

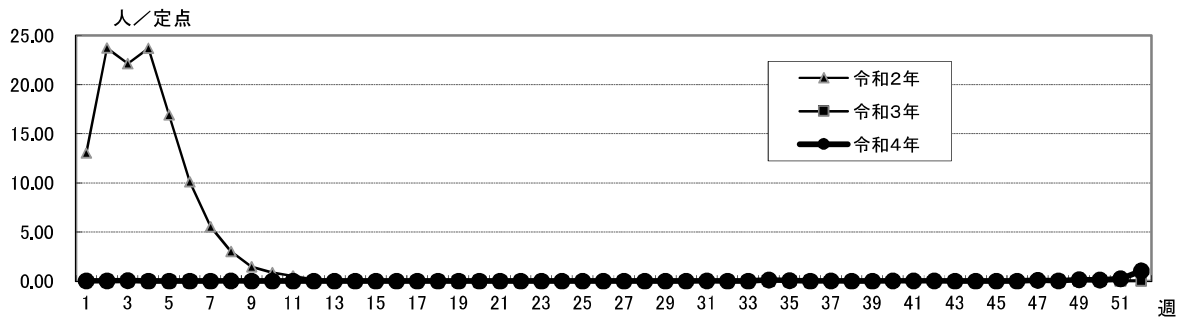


図2-1-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

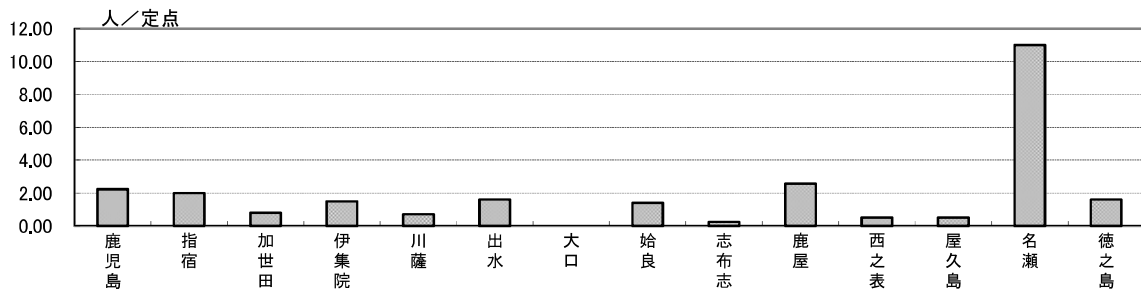


図2-1-2 定点当たり報告数(令和4年保健所別)

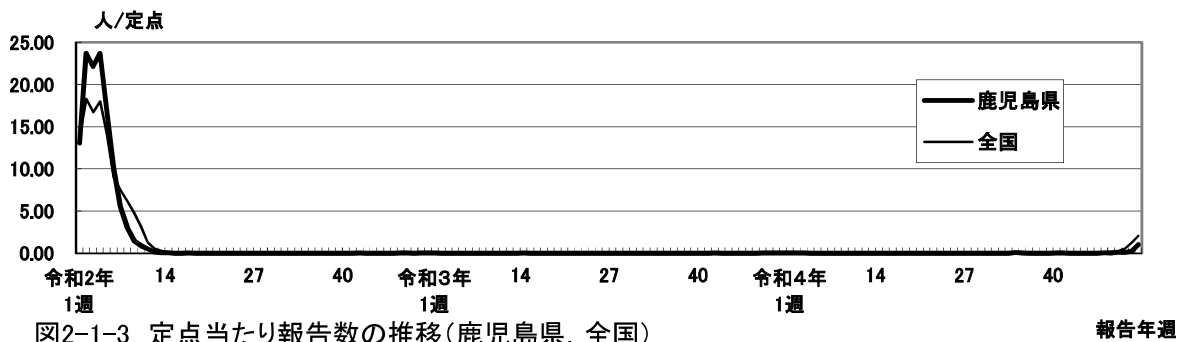


図2-1-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

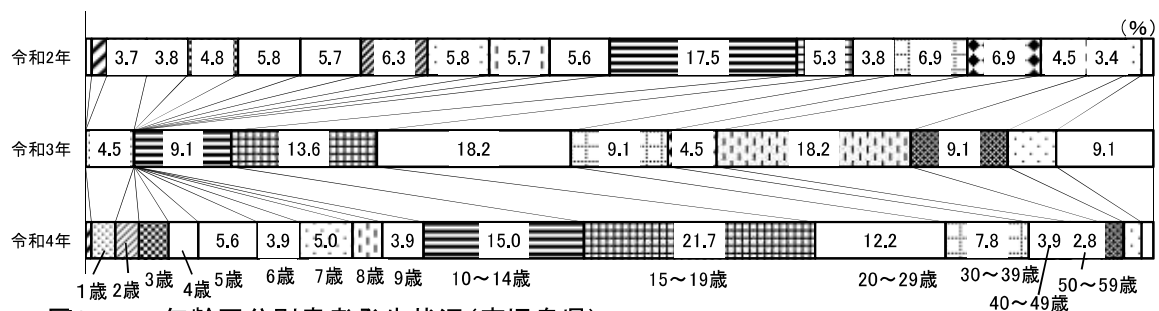


図2-1-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

2)咽頭結膜熱

(定義) 発熱・咽頭炎及び結膜炎を主症状とする急性のウイルス感染症である。

令和4年の咽頭結膜熱は、小児科定点医療機関から1149人(累積定点当たり報告数21.58)の報告があり、令和3年(1860人)より711人少ない報告数であった(図2-2-1)。累積定点当たり報告数を見ると、本県は全国の約2.7倍で推移した(図2-2-3)。保健所別では、出水、鹿屋、始良の順に(図2-2-2)、年齢別では、1歳(50.4%)、2歳(16.7%)、6~11ヶ月(14.2%)の順に多かった(図2-2-4)。

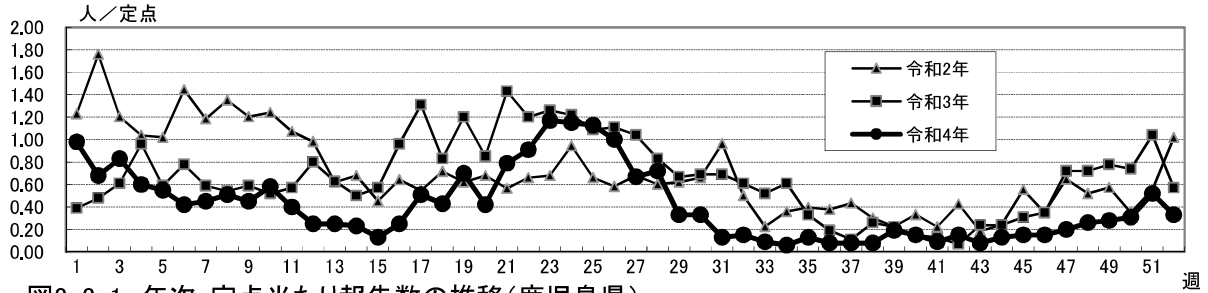


図2-2-1 年次・定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

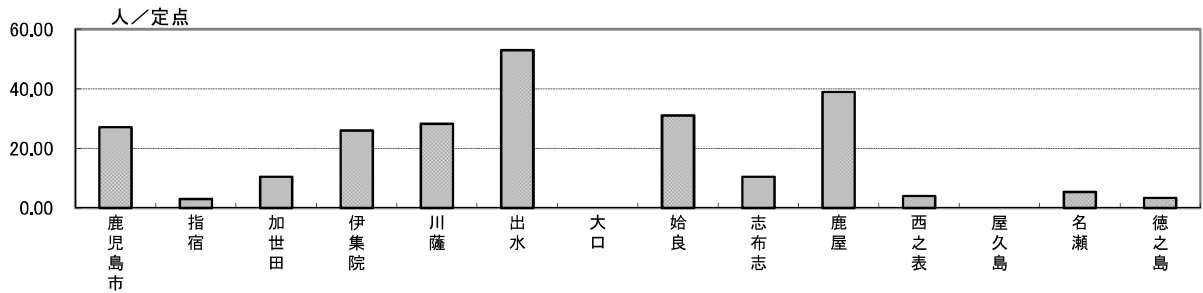


図2-2-2 定点当たり報告数(令和4年保健所別)

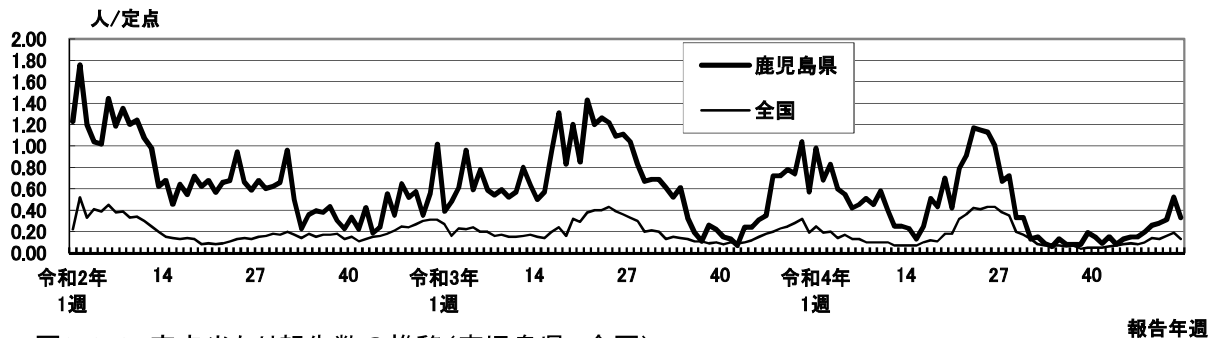


図2-2-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

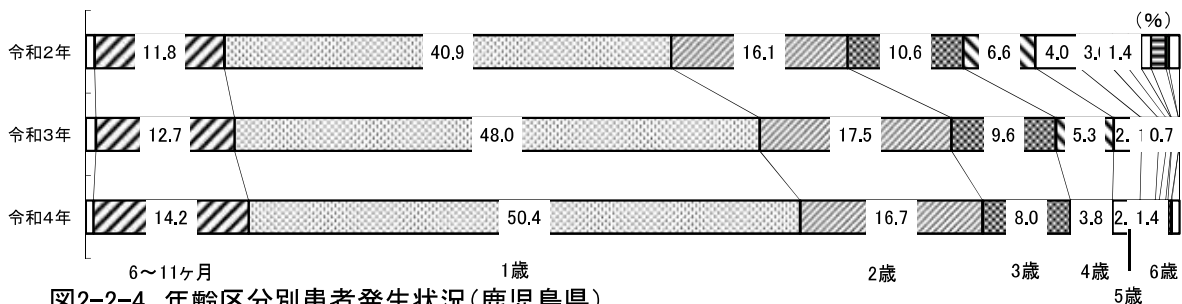


図2-2-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

3)A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

(定義) A群レンサ球菌による上気道感染症である。

令和4年のA群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、小児科定点医療機関から766人(累積定点当たり報告数14.38)の報告があり、令和3年(1902人)より1136人少なかった。年間では第4週(1.23)が最も高値であったが、大きな流行は認められなかった(図2-3-1)。累積定点当たり報告数をみると、全国が本県の約1.2倍で推移していた(図2-3-3)。保健所別では、大口、鹿児島市、出水の順に(図2-3-2)、年齢別では、4歳(12.4%)、2歳(10.9%)、5歳(10.6%)の順に多かった(図2-3-4)。

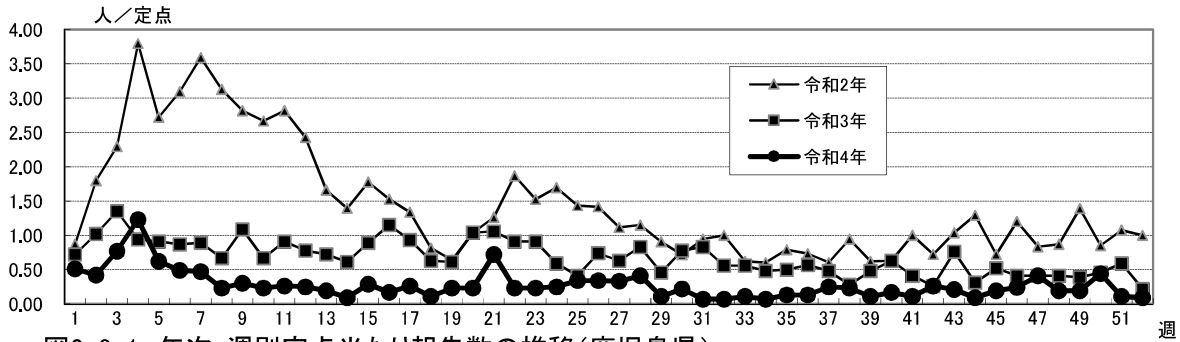


図2-3-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

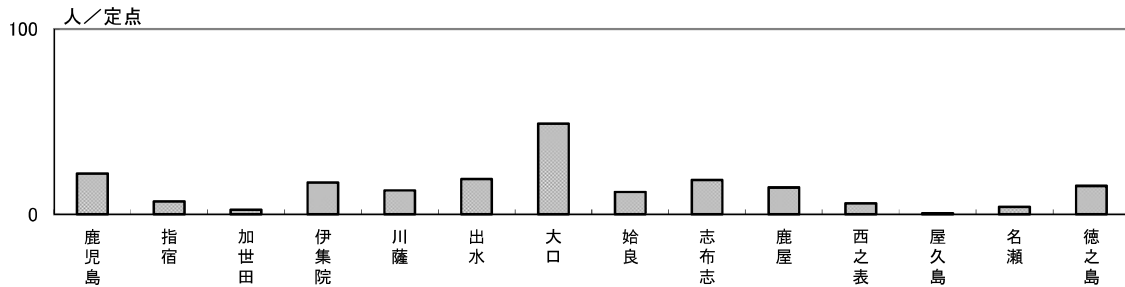


図2-3-2 定点当たり報告数(令和4年保健所別)

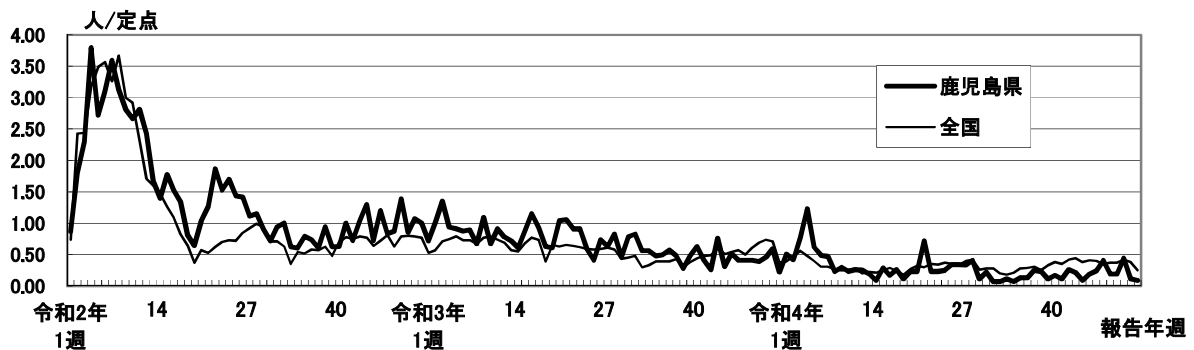


図2-3-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

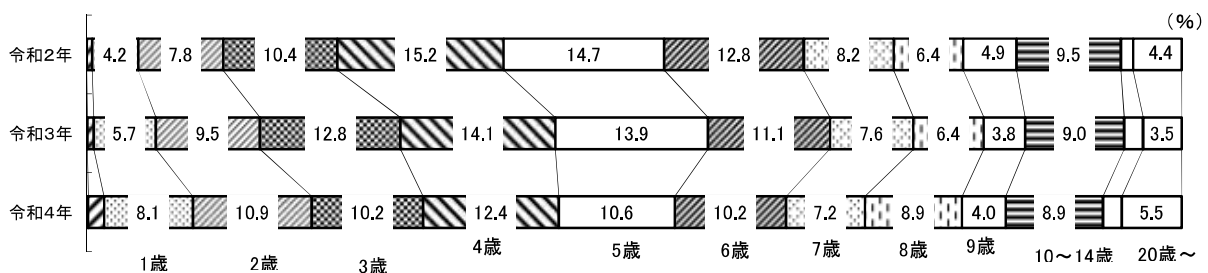


図2-3-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

4) 感染性胃腸炎

(定義) 細菌又はウイルスなどの感染性病原体による嘔吐, 下痢を主症状とする感染症である。原因はウイルス感染(ロタウイルス, ノロウイルスなど)が多く, 毎年秋から冬にかけて流行する。また, エンテロウイルス, アデノウイルスによるものや細菌性のもみられる。

令和4年の感染性胃腸炎は, 小児科定点医療機関から13881人(累積定点当たり報告数260.68)の報告があり, 令和3年(13477人)より404人多かった。第3週(10.91)が最も高値であった(図2-4-1)。累積定点当たりの報告数をみると, 本県は全国の約1.3倍で推移した。前半は本県の定点当たり報告数が全国を上回っていた(図2-4-3)。保健所別では, 鹿屋, 鹿児島市, 指宿の順に(図2-4-2), 年齢別では, 1歳(17.1%), 2歳(14.2%), 10~14歳(10.7%)の順に多かった(図2-4-4)。

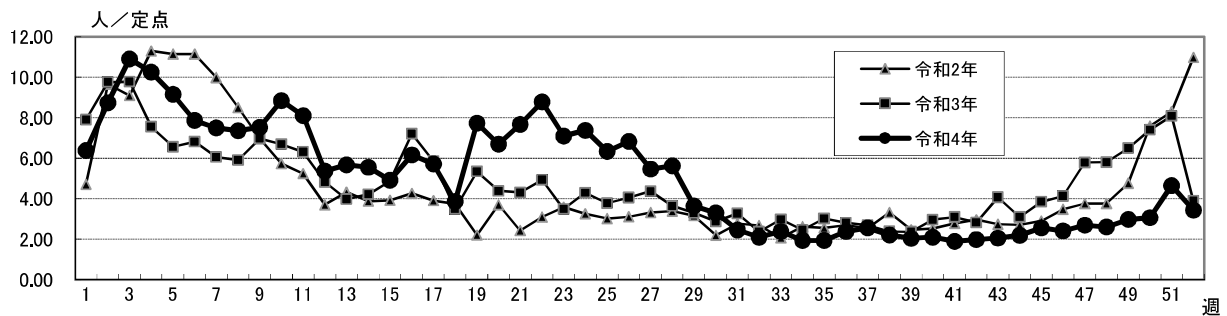


図2-4-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

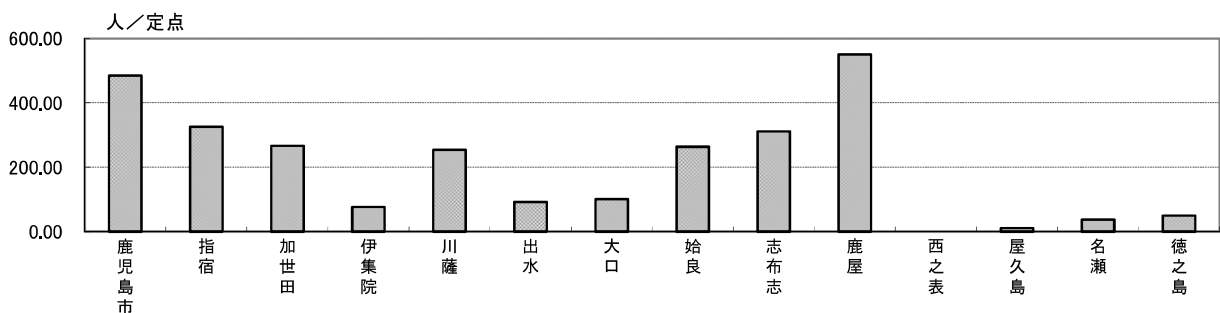


図2-4-2 定点当たり報告数(令和4年保健所別)

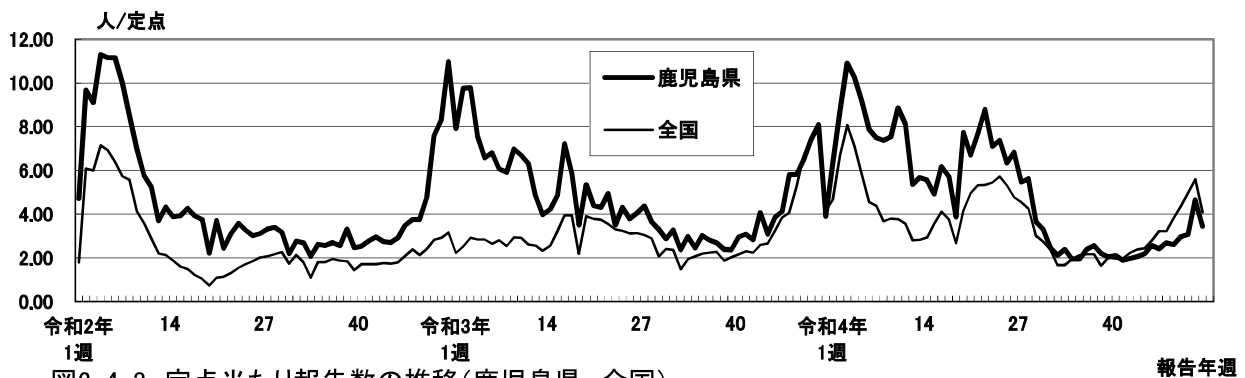


図2-4-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

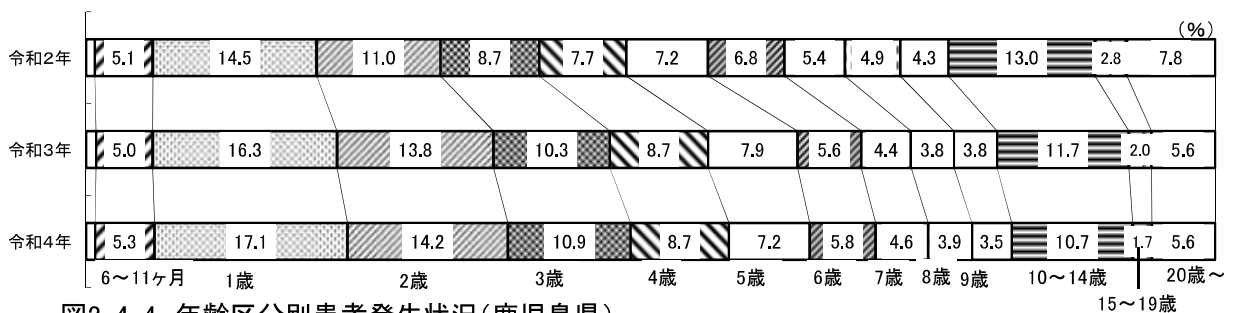


図2-4-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

5)水痘

(定義) 水痘・帯状疱疹ウイルスの初感染による感染症である。

令和4年の水痘は、小児科定点医療機関から225人(累積定点当たり報告数4.23)の報告があり、令和3年(440人)より215人少なかった。年間では第11週(0.21)が最も高値であり、年間を通じて大きな流行は認められなかった(図2-5-1)。累積定点当たり報告数をみると本県は全国の約1.1倍で推移した(図2-5-3)。保健所別では、鹿児島市、出水、鹿屋の順に(図2-5-2)、年齢別では10～14歳(14.2%)、4歳(12.4%)、1歳(11.1%)の順に多かった(図2-5-4)。

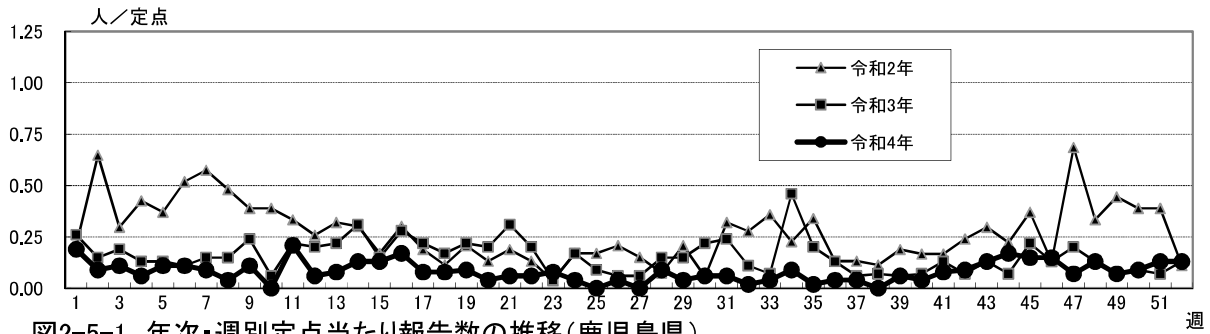


図2-5-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

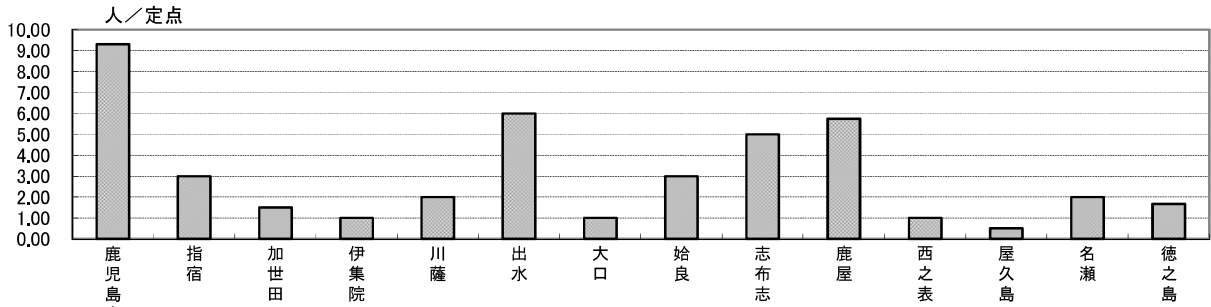


図2-5-2 定点当たり報告数(令和4年保健所別)

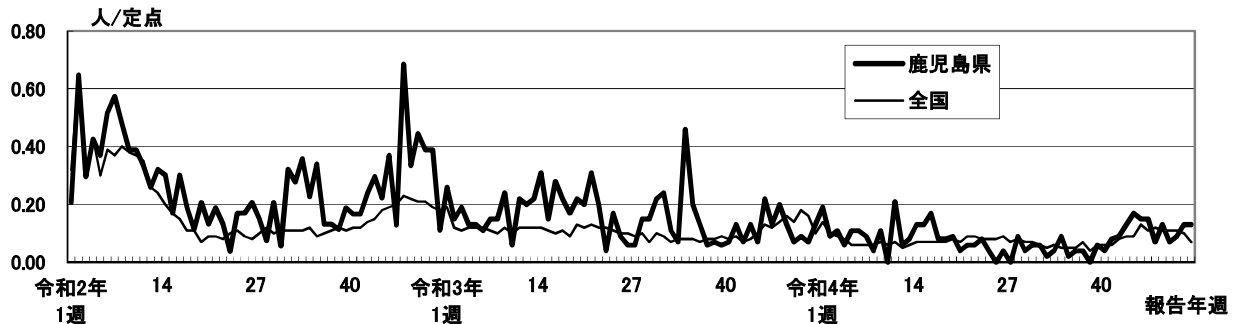


図2-5-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

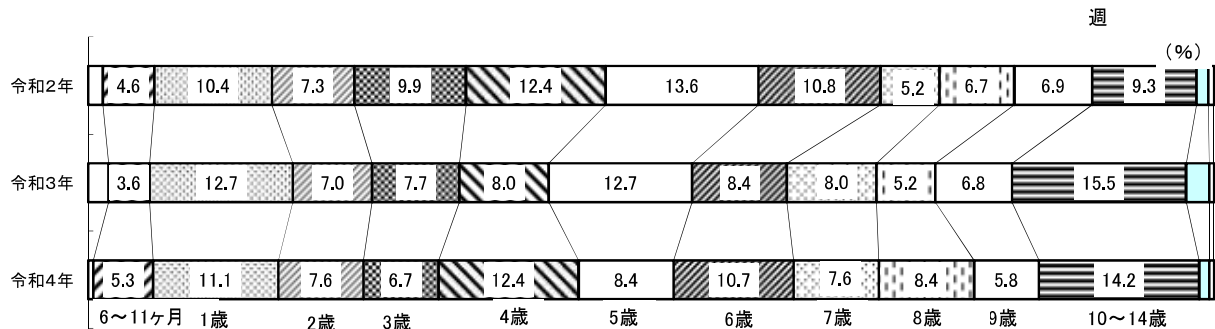


図2-5-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

6)手足口病

(定義) 主として乳幼児にみられる手、足、下肢、口腔内、口唇に小水疱が生ずる伝染性のウイルス性感染症である。コクサッキーA16型、エンテロウイルス71型のほか、コクサッキーA10型その他によっても起こることが知られている。

令和4年の手足口病は、小児科定点医療機関から3274人(累積定点当たり報告数61.48)の報告があり、令和3年(5515人)より2241人少なかった。令和2年、令和3年の各年の推移をみるとそれぞれ独特な推移の形状を呈していた。年間では第27週(3.54)が最も高値であった(図2-6-1)。累積定点当たり報告数をみると本県は全国の約1.2倍で推移した(図2-6-3)。保健所別では、鹿児島市、鹿屋、川薩の順に多かった(図2-6-2)。年齢別では、1歳(43.5%)、2歳(24.2%)、6~11ヶ月(11.4)の順に多く、3歳以下が全体の約91%を占めた(図2-6-4)。

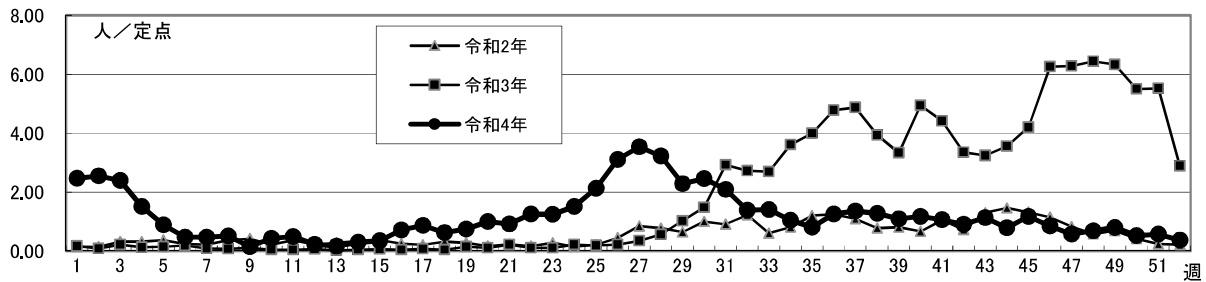


図2-6-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

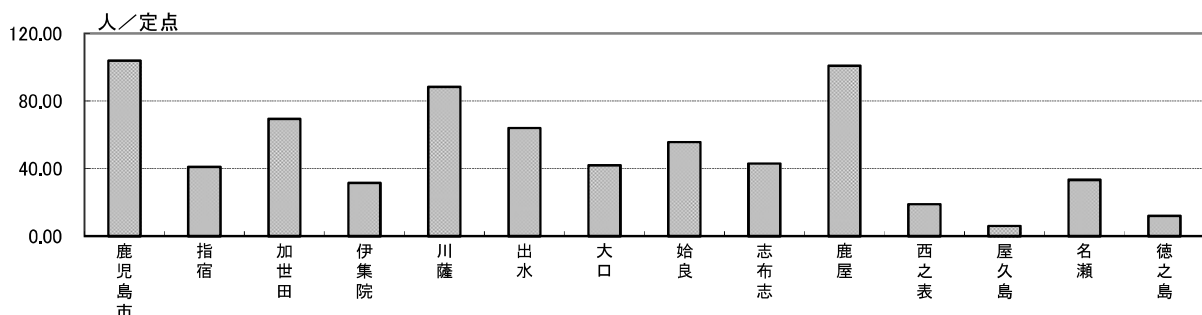


図2-6-2 定点当たり報告数(令和4年保健所別)

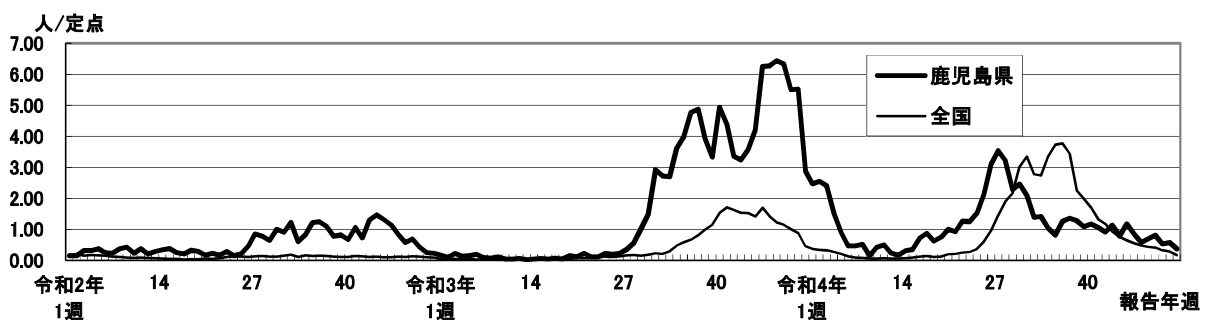


図2-6-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

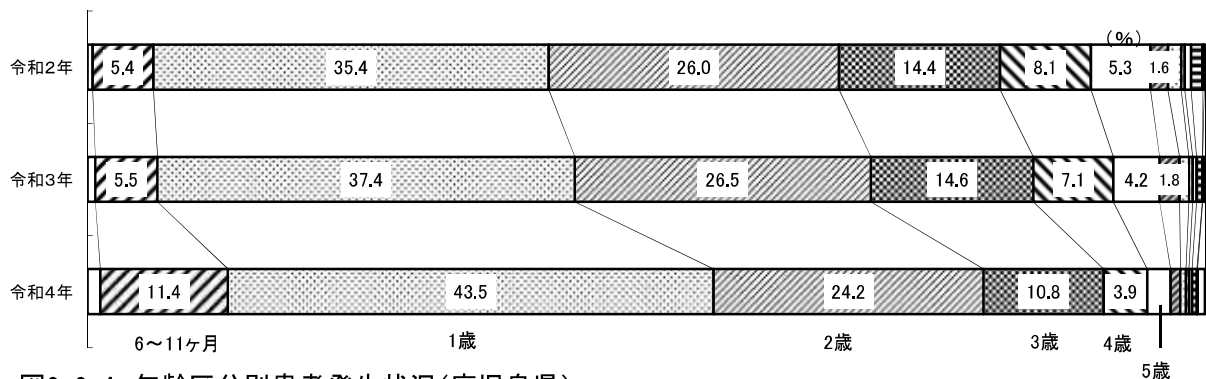


図2-6-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)